

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第985号 平成27年8月21日

グライダーと飛行機

外山滋比古氏の書かれた「思考の整理学」という本の中に、「グライダー」と題した、「グライダー型人間」と「飛行機型人間」について書かれた一文があります。

その中で外山氏は、「人間には、グライダー能力と飛行機能力があり、受動的に知識を得るのが前者、自分でものごとを発明、発見するのが後者である」としています。そして、「両者は一人の人間の中に同居している」と指摘すると共に、「グライダー能力を全く欠いては、基本的知識すら習得できない。何も知らないで独力で飛ぼうとすれば、どんな事故になるか分からない。しかし、現実には、グライダー能力が圧倒的で、飛行機能力はまるでなしという“優秀な”人間が沢山いる事も確かで、しかも、そういう人も“翔べる”という評価をうけている。」と皮肉を込めて述べています。

外山氏は、グライダー能力と飛行機能力の優劣を論じている訳ではありません。ただ、実社会では、飛行機能力、つまり自ら目標を立て、課題を解決しながら前に進む能力が求められているのに、現実には、予め敷かれたレールの上を、決められたように走るグライダー能力に長けた優等生の多い事を嘆いているのだと思います。

その原因の一つとして、教育の在り方に触れています。

外山氏は、現在の学校は、グライダー型人間の訓練所だと述べています。つまり、子ども達は、先生と教科書に引っ張られて勉強しており、グライダーのようなものだという訳です。氏は、そういう学校教育を否定している訳ではなく、基本的知識を習得する上で、学校教育の役割の必要性を認めつつ、一般に、学校教育を受けた期間が長ければ長い程、自力飛翔の能力は低下すると指摘しています。

「思考の整理学」という本が出版されたのは、1980年代の前半、今から30年以上も前の事になりますが、今日においても外山氏の指摘を否定出来ないところに悩ましさがあります。

学校教育法では、例えば「小学校の教育の目標」について、次のように規定しています。

生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、「基礎的な知識及び技能を習得させる」と共に、「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力を育み」、「主体的に学習に取り組む態度を養う」事に、特に意

を用いなければならない。

これを、先程のグライダー能力と飛行機能力に重ね合せると、「基礎的・基本的な知識能力を習得させる」というのはグライダー能力の養成という事であり、「基礎的・基本的知識を活用する力を養う」というのは、飛行機能力の養成という事になるでしょう。

つまり、学校教育法が本来求め、期待しているのは、学校教育はグライダー型人間の養成機関に甘んじていてはならないという事だと思いますが、法の期待しているところに十分応えていない学校が多いというのが現実ではないかと思えます。しかも、「基礎的・基本的知識技能の習得」という期待に対してさえ、しっかりと応えようとしないうちが今なお存在する事に、驚きを隠せません。

「二兎を追うものは…」という諺があります。つまり、二兎を追えば結局どちらも手にする事が出来なくなるから、いずれかに集中した方が効率的であるという事ですが、こうした考え方は、「学力以外にも大事なものがある」という言葉に代表されるように、往々にして学力向上に積極的に取り組まない事の言い訳に使われているように感じます。

私は、本来学校教育においては、グライダー能力と飛行機能力の双方、つまり二兎を如何にバランス良く身に付けさせるかが問われているのであり、各学校においてはそのために最善の努力をすべきだと思っていますが、高度に情報化が進み、社会の構造も急速に変化しつつある現状に目をやれば、外山氏も述べているように、私はむしろ、グライダーにエンジンを搭載した「グライダー兼飛行機」型人間を養成するにはどうすべきか、この事を学校も社会も真剣に考えて行かなければならないと考えているところです。

(塾頭 吉田洋一)